

17. ギリシアの女詩人

ギリシアの女詩人サフォー、正しく言えばサッポー（Sappho）はキリスト紀元前六百年ごろ、中国では周の定王の時代に生まれた。その生前の行いはすでに考証できない。ただ古代史家の言によれば、サフォーには二人の弟があり、一人はラリコス（Larikhos）と言ひ、郷宴で盃を持つ者で、旧例ではこの職は名門の子弟で賢く美しいものが当てられたから、彼がレスボス

（Iesbos）の貴族であったことがわかる。次はハラクソス（Kharaxos）と言ひ、酒の運搬を職業とし、エジプトでロドピス（Rhodopis）という名の娘に逢ひ、それが気に入って、巨額のお金でその身を贖った。ロドピスというのはバラの頬という意味で、もとはイアドモン（Iadmon）家の奴隷で、『寓言』の作者アイソポス（Aisopos, 旧訳イソップ）と同僚であった。後世サフォーはアンドロス（Andros）の金持ちケルコラス（Kerkolas）に嫁したとも言われるが、考証のしようがない。しかもケルコラスの本義は尾と言う、（引伸して男根となる、案ずるに中国で交尾と言うようなものである、）アンドロスとは牡である。けだしギリシア末世の喜劇作者の作ったもので、嘲弄に使われる。又サフォーはファオン（Phon）の美しさを慕ひ、彼に従おうとしたがファオンが承知せず、そこで白岩（Leukas）から身を投げて死んだ。（愛慕したがうまくいかず、岩の上から海に身を投げた、あるいは死ななかつたが、その愛も自然と冷めたとも伝えられる。）ただ一世紀の頃のヘファイスティオン（Hephaistion）の編んだ岩より身を投げた人名表には、サフォーの名はなく、ギリシアの詩人もサフォーは故郷に葬られ、海で死んだのではないと言ひ、近世の学者は後世のデマだと断言する、ほとんど易安居士〔李清照〕の再婚の話のようなものか。

ギリシア神話には九人の神女がいて、文章音楽の事を司るが、人はサフォーを第十の神女と称し、又ホメロス（Homerós, 旧訳ではホーマー）を詩人とし、サフォーを女詩人とし、その推重すること至れり尽くせりである。ただ後世キリスト教はその詩があまりに艶麗なのを欠点として、三百八十年にその他のギリシア人の詩集と一緒に焼いてしまったので、今日に伝わらない。ただギリシア・ローマの著作の中に引用されているものから集めて百余条を得たが、句になっているものはわずかに半分、章を成すものは十分の一にも及ばない。その詩は情も文もともに優れていて、物に擬えた麗句は特に微妙を極める。今その意をざっと述べて、その一斑を示そう。その一に云う。

“涼風は囁き、棠棣の枝の間を過ぎ、眠気は自ずから流れて、震える葉から滴る。”

よく南方園林の景を描けていて、テオクリトス（Theokritos）の牧歌第七に、“白楊榆樹は頂を揺らし、神女廟辺に靈泉自ずから湧き、私語を聞くが如し”と云うのは、まるでこれに近い。その二に云う。

“月は落ち星は沈み、良夜はすでに半ばなり、光陰は自ずから逝きて、吾はいま独り臥す。”その三に云う。

“満月すでに昇り、女の伴は神壇をめぐるて立ち、あるものは雅舞をなし、若草の芳しき花を踐む。”

その四に云う。

“甘棠の色は枝先に^ま頼かく、採る者が忘れた、——あえて忘れたのではない、ただ届かなかっただけだ。”

甘棠 (Glukumalon) というのはリンゴを柚子の木に継いでできたもので、愛称として使う。テオクリトスの詩の第九に、“わたしの愛しいものよ、わたしはお前甘棠を歌う。”その五に云う。

“山上の水仙のように、牧人に踏まれて、花は地に^ま萎れた。”ローマの詩人カトゥルス (Catullus) は、“お前はもう前の人を思ってはならない、それだけでわたしの愛を殺してしまう、野の花が鋤に押しつぶされるように、”と云い、又ヴェルギリウス (Vergilius) は少年の死を描いて云う、“彼はたちまちに萎え死んだ、紫の花が犁に裂かれるように。”ほとんどみなサフォーから出ている。ある人はサフォーは薔薇が好きで、常に詠嘆して、それを美人に擬えたと言うが、上に挙げたようなのもその一例とすることができる。サフォーは又文辞を練るのがうまい。上文の甘棠のように。又鶯を春の使い (Eros angelos) と言い、愛を甘苦 (Glukupikron) と言う。イギリスの詩人スウィンバーン (Swinburne) は最もこれを使うのを喜び、かつて“甘中最も苦く、苦中最も甘きものは”という句がある。サフォーは又愛を詠んで云う。

“愛は我が心を揺らす、山風が櫟の木に降るように。”

まだ二章やはり愛恋を歌うものがあり、篇幅はやや長く、集中の花冠だが、ここに訳すことはできない。訳詩の難しさは、中外同じで、同系統の言葉でさえ合わせることはできないのに、ましてギリシアと華語の隔たりでは、そしてサフォーの詩は又翻訳できないと言われるものであるからには。だからわたしは僅かに一二を選んで、その大意を上のように述べるだけで、強いて韻語に当てはめることはしない。もし人がこれを見てサフォーの詩はこの程度に過ぎないと思うならば、それはみな叙述者の過ちであって、サフォーの詩とはもとより関係がない。

以上は民国四年に書いたもので、紹興の『禹域日報』に載せた小文で、劉大白氏の詩集『旧夢』の序で言及したことがあり、近日ふと故紙の山から見つけたので、それを「茶話」に転録した。これは当然わたしがいわゆる古文を書けることを表彰し、孤桐氏の清覧を求めようとしたのではない。だがサフォーが海に飛び込んだ話は流伝があまりに久しく、みんなが喜んで口にし、最近の『東方雑誌』（二三の一）にも一幅の投崖図が転載され、いまサフォーの事跡をざっと説明しようとするれば、あるいは役に立たぬこともないかもしれない。実際はだ、“身後の是非は誰か管するを得ん、満村蔡中郎を唱うを聞く”で、海に飛び込む説もそれでいいのかもしれない。それにむりに“レズ党”にサフォーを祖師と奉らせる学者もいて、Sapphism という言葉が Tribadism と同義になってしまった。ドイツのヴェルカー (Welker)、イタリアのコンパレッティ (Comparetti)、イギリスのワートン (H. T. Wharton) など、十九世紀ヨーロッパの学者たちは真実を求めるために、サフォーのためにたくさんの流言を訂正した。もし完全に彼女を一人の詩人として見るならば、こうした伝説がくつつくことは逆にもっと面白いことかもしれない。

上文で述べた二篇の比較的長い恋愛詩の一つは、「愛しいひとに贈る」(Eis Eromenan) と呼ばれるもので、去年訳し、『語絲』の第 20 期に載せた。また「ギリシアの小詩」という文でもサ

フォーの詩の断片五条、および墓誌銘一首を訳した。今日彼女の遺詩の輯本をめくっていて、第八十五節を見、とても喜ばしく思ったので、引き写すことになった。

わたしには好い娘がいる、
身体は黄金の花のよう、
それは可愛いクレイス、
わたしはあの美しいレスボスを希まない、
またリディアの全部も要らない。

レスボス島は作者の故郷であり、リディア(Lydia) は小アジアのギリシア領であり、クレイス(Kleis) はサフォーの娘だそうである。——おお、この詩の訳のなんと拙いことよ、なんとくだくだしいことよ、幾つもの余計な無駄な字がある。レスボスという言葉は原文になく、原編者がつけ加えたもので、わたしには関係ないことだけれども。要するに、詩を訳するのは罰として掌を打つべきことである。ましてや又わたしのこのようなへボ訳では。 民国十五年三月九日。

※初出：1926年4月12日『語絲』第74期